

# 日常生活における宗教的行動と意識

研究開発室 小谷 みどり

## 目次

1. 調査の背景と概要	5
2. 宗教的行動の実態	6
3. 信仰の度合いと宗教的態度	10
4. まとめ	15

## 要旨

- ① 年中行事で実施率が高いのは「初もうで」(76.4%)、「お盆」(74.0%)、「クリスマス」(63.2%)の順であった。子どもの頃と現在とを比べると、「初もうで」「お彼岸」「お盆」は減少幅が小さく、実施率も高いことから、国民的な年中行事として定着しているといえよう。
- ② 日ごろおこなっている宗教的行動では、「年に1、2回程度は墓参りをしている」(78.7%)、「仏壇や神棚に花を供えたり、手を合わせたりする」(70.5%)、「先祖や亡くなった肉親の霊をまつる」(50.7%)など、慰霊的行動の実施率が高かった。こうした慰霊的行動は、特定の宗教や宗派の信仰の度合いに関わらず、おこなわれていた。
- ③ 今回の調査対象者のうち、特定の宗教や宗派を信仰している人は30.7%であった。年齢が下がるにつれて「信仰していない」人の割合が増えるが、「65～74歳」でも、「信仰していない」「どちらかといえば信仰していない」を合わせると、56.6%と半数以上が信仰していない。
- ④ 宗教的態度の因子としては「霊魂応報」「向宗教性」「加護」の3つが検出された。このうち、信仰の度合いを規定する要因は「向宗教性」因子だけであった。
- ⑤ 今回の調査から、創設宗教の信仰とは別の次元で、宗教「的」観念を持ち、宗教「的」行動をおこなっている様子が浮き彫りになった。死者儀礼としての慰霊的行動は創設宗教と結び付けられることが多いが、こうした行動の背景にある意識は創設宗教の信仰と別の概念で捉える必要があるといえよう。

キーワード：慰霊的行動、宗教的態度、向宗教性

## 1. 調査の背景と概要

### (1)スピリチュアリティへの関心

昨今、人々の生活において、生活の質（QOL）が重要視されるようになってきている。内閣府「平成18年 国民生活に関する世論調査」でも、「心の豊かさ」と「物の豊かさ」についての考え方をたずねた質問で、「物質的にある程度豊かになったので、これからは心の豊かさやゆとりのある生活をすることに重きをおきたい」と答えた人が62.9%となり、「まだまだ物質的な面で生活を豊かにすることに重きをおきたい」と答えた人は30.4%にとどまった。「心の豊かさ」を重視したいと思う人は、高度成長期以降、おおむね増加する傾向にあったが、今回の調査では過去最多となった。バブル経済崩壊後の長い景気低迷時代を経て、ようやく景気回復の兆しが見えてきたといわれるなかでも、「物の豊かさから心の豊かさへ」の流れに拍車がかかっている。

一方、1999年のWHO総会では、健康の定義をこれまでの「肉体的」「精神的」「社会的」側面からの尺度に「スピリチュアリティ」（霊性）を加えるかどうかの審議がなされた経緯がある（結局は改正に至っていない）。また緩和ケアについては、患者や家族のQOL向上のためには、痛みや心理的な苦痛、社会的、霊的な問題の解決が重要であるとWHOが定義している。わが国でも近年、末期がん患者などの終末期医療の現場において、スピリチュアリティへの関心が高まってきている。

健康や緩和ケアの定義からも分かるように、スピリチュアリティは精神性や宗教性とは異なる概念である。たとえば、わが国では諸外国に比べると、特定の信仰を持つ人が多いとはいえないが、さまざまな宗教「的」な年中行事や祭祀行事がある。また、統計数理研究所の「日本人の国民性調査」（2003年調査）によれば、宗教「的」な心は大切だと考えている人は7割にものぼっており、同調査の経年比較でも、大切だと考えている人の割合は、ここ40年間それほど減少していない。つまり私たち日本人は、信仰を持っていなくても、霊性に対する感性を持ち合わせていないわけではないのだ。

そこで本稿では、宗教とは何か、スピリチュアリティとは何かという根本的な問題はさておき、私たちの日常生活における宗教的な行動の実態や宗教的な意識をアンケート調査から探り、特定の創設宗教（教義のある宗教）の信仰とは異なる私たちの意識について考察してみたい。

### (2)調査の概要

- <調査の時期> 2006年10月25日～2006年11月12日
- <調査対象者> 40歳から74歳までの全国の男女1,000名（第一生命経済研究所生活調査モニターより抽出）
- <調査方法> 郵送調査法
- <有効回収数> 944名（有効回収率 94.4%）

<属性>

(単位：人)

	40～49歳	50～59歳	60～69歳	70～74歳	合計
男性	139 (30.2%)	136 (29.5%)	139 (30.2%)	47 (10.1%)	461 (100%)
女性	145 (30.0%)	145 (30.0%)	147 (30.5%)	46 (9.5%)	483 (100%)

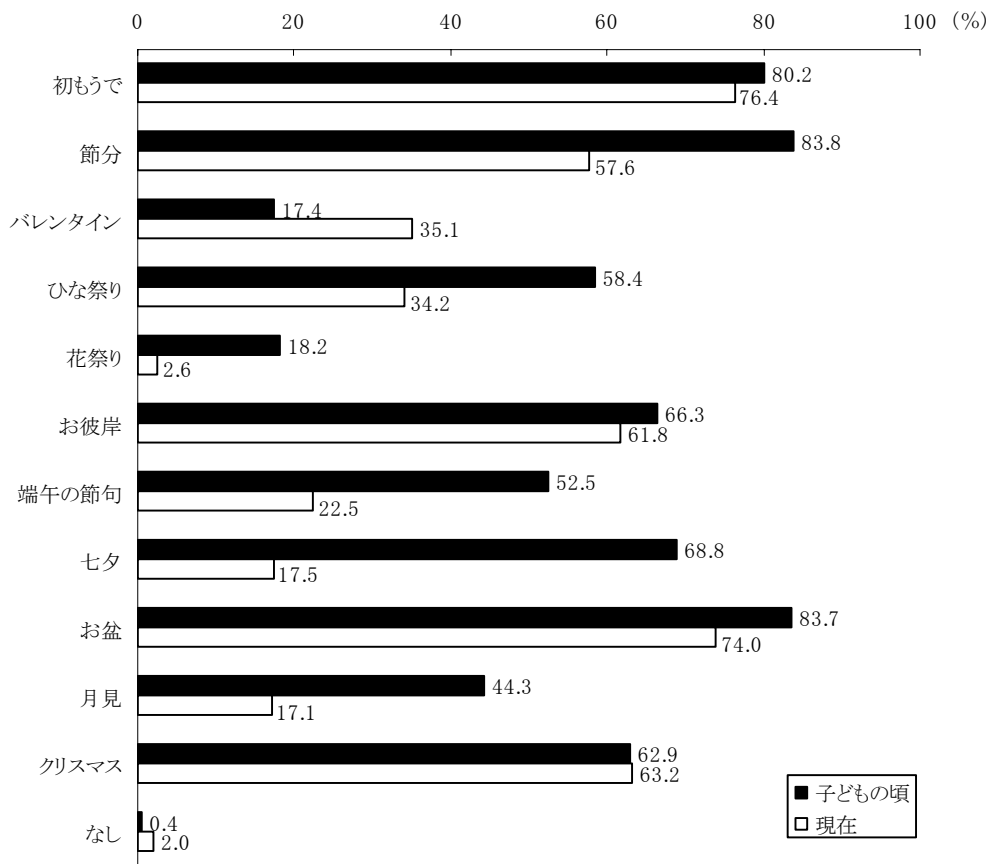
## 2. 宗教的行動の実態

### (1) 年中行事の実施率

調査対象者が子どもの頃におこなっていた年中行事をすべて挙げてもらったところ、最も多かったのが「節分」(83.8%)だが、「お盆」(83.7%)や「初もうで」(80.2%)も実施率が8割を超えた(図表1)。

一方、現在おこなっている年中行事をみると、上位に「初もうで」(76.4%)、「お盆」(74.0%)が挙げたが、実施率自体は子どもの頃に比べると低くなっている。子ど

図表1 年中行事の実施率(子どもの頃と現在)<複数回答>



もの頃に比べて実施率が高くなっているのは「クリスマス」(62.9%→63.2%)と「バレンタイン」(17.4%→35.1%)で、なかでも「バレンタイン」の伸びは大きい。

逆に、現在の減少幅が最も大きいのは「七夕」(51.3ポイント)で、「端午の節句」(30.0ポイント)、「月見」(27.2ポイント)、「節分」(26.2ポイント)、「ひな祭り」(24.2ポイント)と続く。これらは、子どもの行事としての色合いが濃いためだと考えられる。しかし「初もうで」(3.8ポイント)、「お彼岸」(4.5ポイント)、「お盆」(9.7ポイント)は減少幅が小さいうえ、現在の実施率も高いことから、国民的な年中行事として定着している様子が見える。

また年齢層別にみると、「40～49歳」では実施率が高い順に1位が「クリスマス」、2位が「初もうで」、3位が「お盆」と「節分」だが、「50～64歳」や「65～74歳」では「お盆」「初もうで」「お彼岸」が1位から3位を占める(図表2)。「お盆」や「お彼岸」は、年齢層が下がるにつれて子どもの頃の実施率が低くなっているが、「初もうで」は、年齢層が下がるほど実施率がわずかながら高くなっている。

図表2 年中行事の実施率(上位6項目、年齢層別)

	N	初もうで		お盆		クリスマス		お彼岸		節分		バレンタイン	
		子どもの頃	現在	子どもの頃	現在	子どもの頃	現在	子どもの頃	現在	子どもの頃	現在	子どもの頃	現在
40～49歳	284	<u>83.5</u>	<u>77.8</u>	77.1	<u>60.6</u>	85.9	80.6	58.5	45.8	<u>84.9</u>	<u>60.6</u>	35.2	46.1
50～64歳	415	78.1	<u>74.9</u>	84.3	75.7	63.4	61.2	67.2	<u>62.9</u>	<u>81.9</u>	53.7	11.8	33.7
65～74歳	242	<u>80.2</u>	<u>77.3</u>	90.5	86.8	35.1	46.3	74.0	<u>78.9</u>	<u>85.6</u>	60.7	6.2	24.4

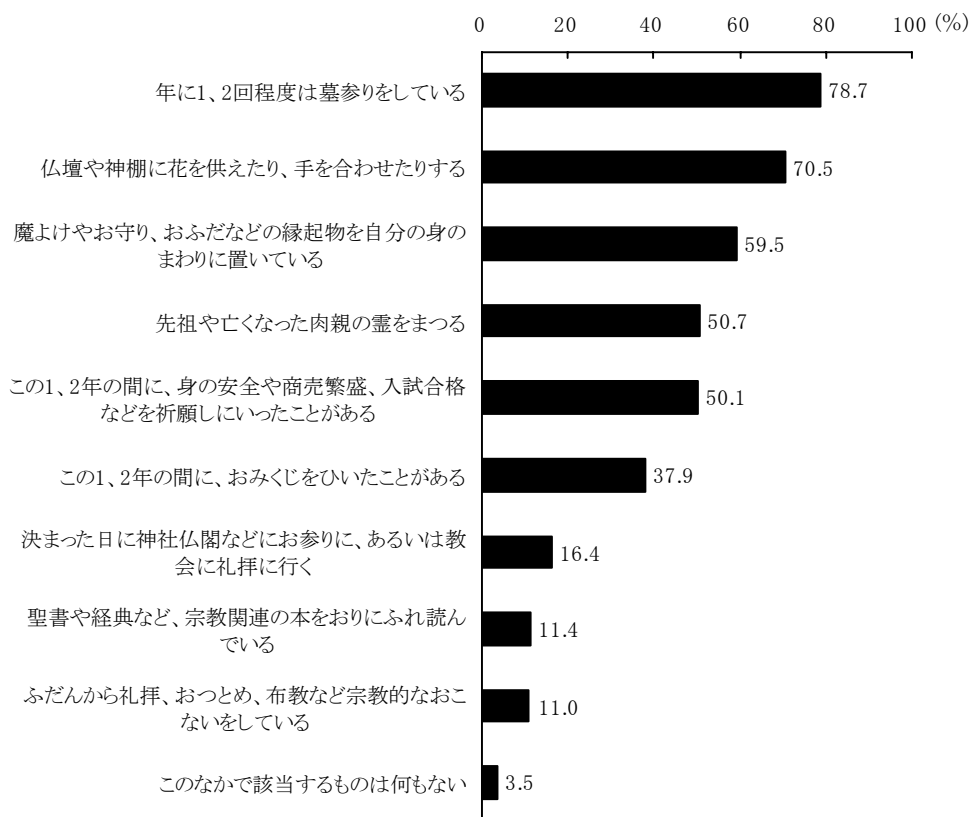
注：網掛けは1位の項目、下線は2位の項目、斜め字は3位の項目

## (2) 日ごろの宗教的行動

日ごろどんな宗教的行動を取っているかをたずねたところ、「年に1、2回程度は墓参りをしている」(78.7%)が最も多く、次いで「仏壇や神棚に花を供えたり、手を合わせたりする」(70.5%)となり、「先祖や亡くなった肉親の霊をまつる」(50.7%)を含め、慰霊的行動の実施率が高いことが分かった(図表3)。

また、「魔よけやお守り、おふだなどの縁起物を自分の身のまわりに置いている」(59.5%)や「この1、2年の間に、身の安全や商売繁盛、入試合格などを祈願しにいったことがある」(50.1%)などの現世利益的行動も実施率が半数を超えているが、「決まった日に神社仏閣などにお参りに、あるいは教会に礼拝に行く」(16.4%)、「聖書や経典など、宗教関係の本をおりにふれ読んでいる」(11.4%)「ふだんから礼拝、おつとめ、布教など宗教的なおこないをしている」(11.0%)という自己修養的行動に関する項目は実施率が低い。

図表3 日ごろの宗教的行動&lt;複数回答&gt;



性別にみると、「年に1、2回程度は墓参りをしている」「仏壇や神棚に花を供えたり、手を合わせたりする」「先祖や亡くなった肉親の霊をまつる」といった慰霊的行動については特筆すべき特徴はみられないが、現世利益的行動である「魔よけやお守り、おふだなどの縁起物を自分の身のまわりに置いている」や「この1、2年の間に、おみくじをひいたことがある」人の割合は女性の方がやや高い（図表4）。しかし「この1、2年の間に、身の安全や商売繁盛、入試合格などを祈願しにいったことがある」については、性別による特徴はみられない。

年齢層別にみると、どの年齢層も慰霊的行動である「年に1、2回程度は墓参りをしている」人の割合が最も高いものの、若い世代の実施率は低い。「仏壇や神棚に花を供えたり、手を合わせたりする」や「先祖や亡くなった肉親の霊をまつる」人の割合も、年齢層が下がるにつれ低くなり、「40～49歳」と「65～74歳」とでは実施率の差はいずれも30ポイント前後ある。40代では、肉親の死に接した経験のある人が多くないのかもしれない。

一方、「魔よけやお守り、おふだなどの縁起物を自分の身のまわりに置いている」や「この1、2年の間に、身の安全や商売繁盛、入試合格などを祈願しにいったことがある」などの現世利益的行動の実施率は、年齢層では顕著な差は見られないが、「この

1、2年の間に、おみくじをひいたことがある」人は年齢層が下がるほど高くなる傾向にあり、「40～49歳」では44.5%もいる。以上のことから、慰霊的行動には年齢層による実施率の違いがみられるが、現世利益的行動では女性でやや実施率が高いという程度で、年齢層による違いはみられなかった。

図表4 日ごろの宗教的行動(性別、年齢層別)＜複数回答＞

(単位：%)

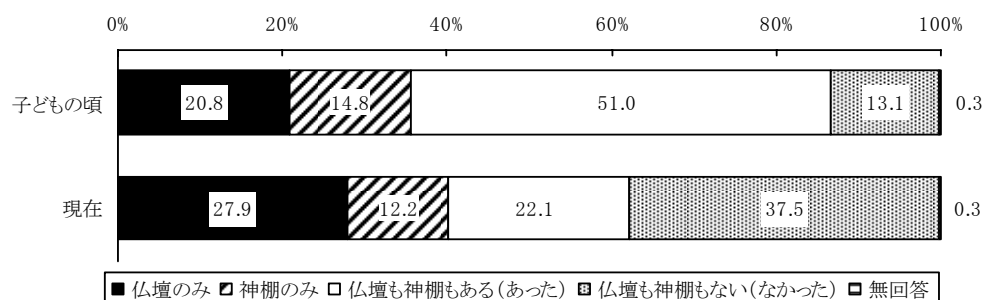
	N	慰霊的行動			現世利益的行動			自己修養的行動			このなかで該当するものは何もない
		年に1、2回程度は墓参りをしている	仏壇や神棚に花を供えたり、手を合わせたりする	先祖や亡くなった肉親の霊をまつる	魔よけやお守り、おふだなどの縁起物を自分の身のまわりに置いている	この1、2年の間に、身の安全や商売繁盛、入試合格などを祈願しにいったことがある	この1、2年の間に、おみくじをひいたことがある	決まった日に神社仏閣などにお参りに、あるいは教会に礼拝に行く	ふだんから礼拝、おつとめ、布教など宗教的なおこないをしている	聖書や経典など、宗教関連の本をおりにふれ読んでいる	
男性	459	78.6	67.3	50.3	54.0	49.2	33.8	18.5	9.6	9.2	4.1
女性	480	78.8	73.5	51.0	64.8	50.8	41.9	14.4	12.3	13.5	2.9
40～49歳	283	68.2	55.5	33.2	59.7	50.5	44.5	15.2	7.4	6.4	5.7
50～64歳	414	81.4	74.4	52.2	58.9	49.3	37.0	12.3	9.7	10.9	2.7
65～74歳	242	86.4	81.4	68.6	60.3	50.8	31.8	24.8	17.4	18.2	2.5

注：網掛けは1位の項目、下線は2位の項目、斜め字は3位の項目

### (3) 仏壇や神棚の保有状況

仏壇や神棚の保有状況について、子どもの頃と現在とでそれぞれたずねたところ、子どもの頃は「仏壇も神棚もあった」と回答した人が51.0%と最も多かったが、現在では「仏壇も神棚もない」と回答した人が37.5%と最も多く、「仏壇も神棚もある」と回答した人は22.1%しかいなかった(図表5)。現在の保有状況をみると、仏壇は全体の50.0%（「仏壇のみ」27.9%+「仏壇も神棚もある」22.1%）、神棚は全体の34.3%（「神棚のみ」12.2%+「仏壇も神棚もある」22.1%）となっている。

図表5 仏壇や神棚の保有状況



### 3. 信仰の度合いと宗教的態度

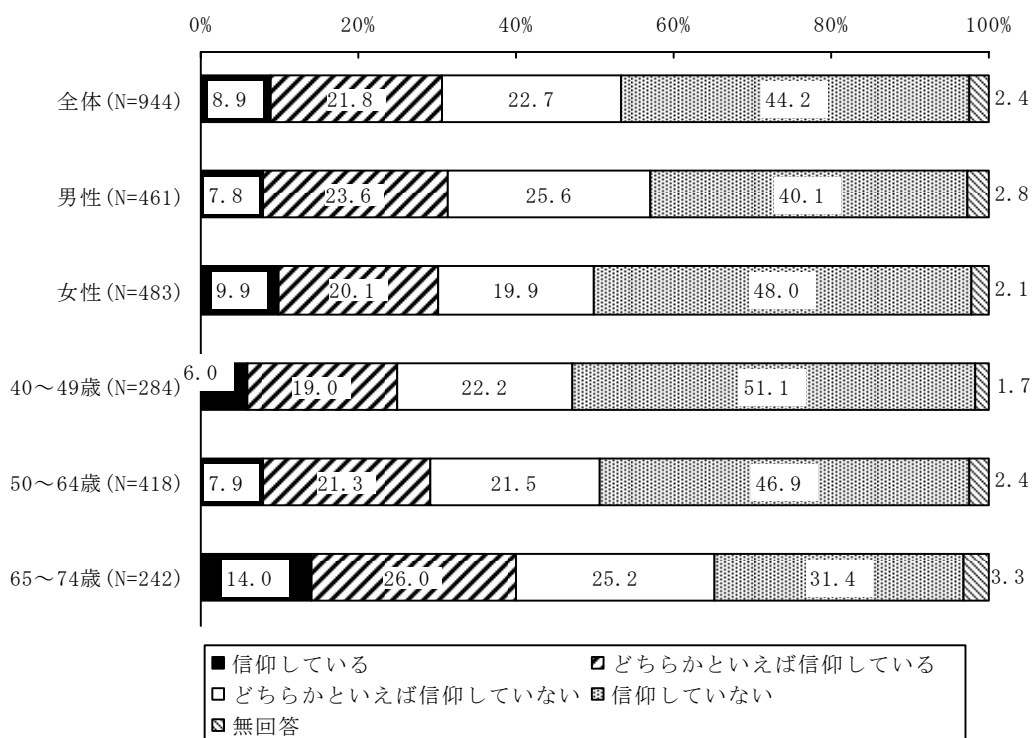
#### (1) 信仰の度合い

家の宗教（法事やお葬式に関係のある宗教・宗派）の有無に関わらず、何か特定の宗教や宗派を信仰しているかどうかたずねたところ、「信仰していない」と回答した人が44.2%と最も多かった（図表6）。一方、「信仰している」と回答した人は8.9%、「どちらかといえば信仰している」人は21.8%で、何らかの宗教や宗派を信仰している人は合わせて30.7%となった。

性別にみると、「信仰していない」と回答した人は女性に多いが、「どちらかといえば信仰していない」と回答した人は男性に多い。性別による特徴はみられない。

また年齢層別にみると、年齢が下がるにつれて「信仰していない」人の割合が増え、「40～49歳」では過半数の51.1%が「信仰していない」と回答した。「どちらかといえば信仰していない」と回答した人と合わせると、この世代では73.3%が信仰していないことになるが、「65～74歳」でも56.6%と半数以上が信仰していない。

図表6 信仰の度合い(性別、年齢層別)



次に信仰の度合い別に宗教的行動の実施率をみたのが、図表7である。すると「信仰している」人の実施率が目立って高かったのは、「ふだんから礼拝、おつとめ、布教など宗教的なおこないをしている」「聖書や経典など、宗教関連の本をおりにふれ読ん

でいる」「決まった日に神社仏閣などにお参りに、あるいは教会に礼拝に行く」といった自己修養的行動であった。

一方、「年に1、2回程度は墓参りをしている」については信仰の有無や度合いによる実施率の差はそれほどないうえ、「仏壇や神棚に花を供えたり、手を合わせたりする」ことについても、「信仰していない」人でも実施率は59.4%にのぼっており、慰霊的行動は信仰に関わらずおこなわれているといえる。

また、「この1、2年の間に、おみくじをひいたことがある」割合は、「信仰している」人で最も低く、「魔よけやお守り、おふだなどの縁起物を自分の身のまわりに置いている」「この1、2年の間に、身の安全や商売繁盛、入試合格などを祈願しにいったことがある」人の割合は、「信仰している」人より「どちらかといえば信仰していない」人の方が高い。つまり、現世利益的行動と信仰の度合いとは関連があまりみられない。

図表7 宗教的行動(信仰の度合い別)＜複数回答＞

(単位：%)

	N	慰霊的行動			現世利益的行動			自己修養的行動			このなかで該当するものはない
		年に1、2回程度は墓参りをしている	仏壇や神棚に花を供えたり、手を合わせたりする	先祖や亡くなった肉親の霊をまつる	魔よけやお守り、おふだなどの縁起物を自分の身のまわりに置いている	この1、2年の間に、身の安全や商売繁盛、入試合格などを祈願しにいったことがある	この1、2年の間に、おみくじをひいたことがある	決まった日に神社仏閣などにお参りに、あるいは教会に礼拝に行く	ふだんから礼拝、おつとめ、布教など宗教的なおこなっている	聖書や経典など、宗教関連の本をお読みしている	
信仰している	84	76.2	83.3	59.5	57.1	47.6	<u>15.5</u>	44.0	63.1	54.8	<u>0.0</u>
どちらかといえば信仰している	205	89.8	86.3	65.4	70.7	60.0	42.9	25.9	16.6	16.1	2.0
どちらかといえば信仰していない	214	79.0	72.0	50.9	62.1	54.2	39.7	14.0	<u>1.4</u>	5.6	3.3
信仰していない	414	<u>74.2</u>	<u>59.4</u>	<u>40.1</u>	<u>52.4</u>	<u>43.0</u>	39.4	<u>7.5</u>	2.4	<u>2.4</u>	5.3

注：網掛けは最も多い項目、下線は最も少ない項目

## (2) 宗教的態度

本調査では、25項目から構成される宗教的態度の尺度(金児 1997)を参考にし、「向宗教性」5項目、「加護観念」3項目、「靈魂観念」5項目の計13質問を設定し、宗教的態度についてたずねた。各質問について「そう思う」～「そう思わない」までの4段階で回答を求めているが、図表8では、宗教的態度に肯定的な意識を持つ人の割合(「そう思う」+「まあそう思う」と答えた割合)を示した。

全体の回答率が最も高いのは「宗教を信じていなくても、幸福な生活を送れる」(80.4%)であったが、性別、年齢層別では顕著な差はない。しかし「神や仏をそま



つにすると、ばちがあたる」(71.3%)、「信仰は死に直面した時の心の支えになる」(64.8%)という質問に対して肯定的な考えを持っている人は多い。なかでも「神や仏をそまつにすると、ばちがあたる」については、男性より女性で、年齢層では「40～49歳」で肯定する人が多くなっている。

全体的に性別ではどの質問も特筆すべき特徴はなかったが、年齢層別では、「死後の世界はあると思う」「死者の供養をしないとたたりがあると思う」「人は死んでも繰り返生まれ変わるものだ」という質問に肯定的な考えを持っている人は、「50～64歳」や「65～74歳」と比べると、「40～49歳」に突出して多い。一方、「観音さんやお不動さんに親しみを感じる」「お盆などの宗教的行事には親しみを感じる」「氏神の祭りは、地域の結びつきを高めるのに必要である」といった質問では、「65～74歳」で多くなっていた。

図表8 宗教的態度(「そう思う」「まあそう思う」の合計、性別、年齢層別)

(単位：%)

	全体	性別		年齢層別		
		男性 (N=461)	女性 (N=483)	40～49歳 (N=284)	50～64歳 (N=418)	65～74歳 (N=242)
死後の世界はあると思う	41.9	38.6	45.1	56.3	<u>35.6</u>	<u>35.9</u>
人は死んでも繰り返生まれ変わるものだ	28.1	23.9	32.1	43.0	23.7	<u>18.2</u>
神や仏をそまつにすると、ばちがあたる	71.3	67.2	75.1	82.4	<u>66.3</u>	66.9
死者の供養をしないとたたりがあると思う	41.9	39.7	44.1	52.4	38.5	<u>35.6</u>
仏様や神様を信心して願いごとをすれば、いつかその願いごとがかなえられる	40.6	38.4	42.6	48.6	<u>35.2</u>	40.5
宗教心がある人は、心が豊かだと思う	41.2	41.6	40.8	<u>33.1</u>	38.2	55.8
信仰をもつことによって、人生の目標が与えられる	48.5	49.7	47.2	48.3	45.0	54.5
どんなに科学が進んでも、人間は信仰がなければ幸せになれない	29.2	32.1	26.3	27.5	26.3	36.0
信仰は、死に直面した時の心の支えになる	64.8	63.8	65.8	67.6	62.0	66.5
宗教を信じていなくても、幸福な生活を送れる	80.4	78.7	82.0	82.1	81.8	76.1
氏神の祭りは、地域の結びつきを高めるのに必要である	65.6	65.1	66.0	66.2	61.9	71.1
お盆などの宗教的行事には親しみを感じる	69.1	69.4	68.8	<u>63.4</u>	67.4	78.5
観音さんやお不動さんに親しみを感じる	57.7	61.4	54.0	<u>47.6</u>	59.3	66.5

注：網掛けは全体平均より5ポイント以上高い項目、下線は全体平均より5ポイント以上低い項目

次にこれらの項目について、因子分析（主因子法、バリマックス回転）をおこなった結果が図表9である。各項目については、「そう思う」（4点）～「そう思わない」（1点）を与えたが、「宗教を信じていなくても、幸福な生活を送れる」はマイナスの意識をたずねる内容になっているため、「そう思わない」に4点、以下順次減点し、「そう思う」に1点を与えた。

第1因子は霊魂応報観念で、因子負荷量が高いのは「死後の世界はあると思う」（0.705）、「人は死んでも繰り返し生まれ変わるものだ」（0.703）、「神や仏をそまつにすると、ばちがあたる」（0.603）、「死者の供養をしないとたたりがあると思う」（0.584）、「仏様や神様を信心して願いごとをすれば、いつかその願いごとがかなえられる」（0.542）であった。

また第2因子は向宗教性で、因子負荷量が高いのは、「宗教心がある人は、心が豊かだと思う」（0.804）、「信仰をもつことによって、人生の目標が与えられる」（0.708）、「どんなに科学が進んでも、人間は信仰がなければ幸せになれない」（0.588）、「信仰は、死に直面した時の心の支えになる」（0.557）、「宗教を信じていなくても、幸福な生活を送れる」（0.424）であった。

第3因子は加護観念で、因子負荷量が高いのは、「氏神の祭りは、地域の結びつきを高めるのに必要である」（0.613）、「観音さんやお不動さんに親しみを感じる」（0.595）、「お盆などの宗教的行事には親しみを感じる」（0.597）である。

図表9 因子分析結果(主因子法、バリマックス回転)

	霊魂応報	向宗教性	加護
死後の世界はあると思う	<b>0.705</b>	0.209	0.099
人は死んでも繰り返し生まれ変わるものだ	<b>0.703</b>	0.213	-0.002
神や仏をそまつにすると、ばちがあたる	<b>0.603</b>	0.012	0.355
死者の供養をしないとたたりがあると思う	<b>0.584</b>	0.055	0.253
仏様や神様を信心して願いごとをすれば、いつかその願いごとがかなえられる	<b>0.542</b>	0.308	0.221
宗教心がある人は、心が豊かだと思う	0.050	<b>0.804</b>	0.221
信仰をもつことによって、人生の目標が与えられる	0.108	<b>0.708</b>	0.162
どんなに科学が進んでも、人間は信仰がなければ幸せになれない	0.390	<b>0.588</b>	0.141
信仰は、死に直面した時の心の支えになる	0.089	<b>0.557</b>	0.274
宗教を信じていなくても、幸福な生活を送れる	0.220	<b>0.424</b>	-0.024
氏神の祭りは、地域の結びつきを高めるのに必要である	0.086	0.201	<b>0.613</b>
お盆などの宗教的行事には親しみを感じる	0.235	0.142	<b>0.597</b>
観音さんやお不動さんに親しみを感じる	0.146	0.124	<b>0.595</b>
固有値	4.522	1.686	1.404
分散の%	34.79	12.97	10.80

これら3つの因子に関わる質問項目の得点を合計して合成尺度を作成したところ、3つの因子のうち第1因子と第2因子はともに信頼性尺度 $\alpha$ は0.7以上だったが、第3因子の信頼性尺度 $\alpha$ も0.686で、尺度の信頼性は比較的高いといえる。またこれらは、先行研究の因子構造とも合致した。

次に、第1因子「霊魂応報」と第2因子「向宗教性」、第3因子「加護」の項目の得点を合計し、属性でみたのが図表10である。

まず性別では、霊魂応報得点と向宗教性得点は女性の方が高く、霊魂応報得点は性別で有意な差が検出された。一方、加護得点は、有意差はないものの、男性の方が高い。年齢層別では、霊魂応報得点は年齢が上がるにつれて低くなるが、向宗教性得点と加護得点は年齢が上がるにつれて高くなる。年齢層別ではすべての因子において有意な違いが認められた。

図表10 第1因子「霊魂応報」、第2因子「向宗教性」、第3因子「加護」の得点(性別、年齢層別)

		霊魂応報	向宗教	加護
全体		11.84	11.54	8.26
性別	男性	11.45	11.49	8.33
	女性	12.22	11.59	8.20
検定		t=-3.36, df=918, p<0.05		
年齢層別	40~49歳	13.05	11.35	7.96
	50~64歳	11.34	11.24	8.22
	65~74歳	11.27	12.29	8.70
検定		F=2.94, df=918, p<0.001	F=2.50, df=919, p<0.01	F=3.57, df=918, p<0.001

さらに、それぞれの因子得点の平均値で2分し、高グループと低グループとに分類したうえで、各因子の高低ごとに信仰の度合い(「信仰している」を4点とし、以下順次減点し、「信仰していない」を1点とした)を出したのが図表11である。その結果、すべての因子において、因子得点が高いグループでは、低いグループに比べると、有意に信仰の度合いが高くなっていた。

図表11 信仰の度合い(因子得点の高低別)

	霊魂応報		向宗教性		加護	
	低グループ	高グループ	低グループ	高グループ	低グループ	高グループ
	1.73	2.13	1.54	2.36	1.73	2.17
検定	t=-6.07, df=917, p<0.001		t=-13.26, df=917, p<0.001		t=6.80, df=916, p<0.001	

そこで信仰の度合いの背景要因を探るため、これら3因子を説明変数とし、信仰の度合いを被説明変数とする重回帰分析をおこなったところ、向宗教性のみが有意な効果を示した(図表12)。すなわち、信仰の度合いに影響を及ぼす有意な要因は向宗教性

のみで、霊魂応報観念や加護観念は、信仰の度合いを規定する要因ではなかった。

図表12 信仰の度合いを被説明変数とした重回帰分析の結果

向宗教性	0.504 ***
霊魂応報	0.001
加護	0.062
F値	119.57 ***
調整済決定係数	0.279
有効ケース数	917

注1:\*\*\*は $p<0.001$

注2:図中の数字は標準偏回帰係数

#### 4. まとめ

今回の調査対象者では、「年に1、2回程度は墓参りをしている」「仏壇や神棚に花を供えたり、手を合わせたりする」「先祖や亡くなった肉親の霊をまつる」といった慰霊的行動の実施率が高かった。しかし慰霊的行動の実施率は、40代では50歳以上と比較すると大きく落ち込む傾向が見られた。金児（1997）は、日本人の宗教性に関する研究の結果、およそ50歳が宗教意識の分岐点であると指摘しているが、本調査の結果でもそうした傾向がうかがえた。

また「魔よけやお守り、おふだなどの縁起物を自分の身のまわりに置いている」「この1、2年の間に、身の安全や商売繁盛、入試合格などを祈願しにいったことがある」などの現世利益的行動は、年齢に関わらず実施率は半数程度あった。慰霊的行動や現世利益的行動は、信仰の度合いと関連があまりなく、日ごろの宗教的行動として定着している様子が見られた。

宗教的態度の因子としては「霊魂応報」「向宗教性」「加護」の3つが検出された。年齢が上がるにつれて、「加護」観念は強くなるが、「霊魂応報」観念は弱くなっていた。またすべての因子で因子得点の高い人は、信仰の度合いが高い傾向が見られたものの、信仰の度合いを規定する要因は「向宗教性」因子だけであった。

以上のことから、私たちの多くは創設宗教の信仰とは別の次元で、宗教「的」観念を持ち、宗教「的」行動をおこなっている様子が浮き彫りになった。特に、死者儀礼としての慰霊的行動は創設宗教と結び付けられることが多いが、こうした意識は「霊魂応報」や「加護」など、信仰とは別個の概念で捉える必要があるだろう。

（研究開発室 主任研究員）

#### 【参考文献】

- ・金児暁嗣，1997，『日本人の宗教性』新曜社。